

琉球大学学術リポジトリ

琉球列島の陶磁交易と国家形成

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 琉球大学 公開日: 2019-05-09 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 瀬戸, 哲也 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/20.500.12000/44336

様式第7号

学 位 論 文 要 旨

学位論文題目

琉球列島の陶磁交易と国家形成

琉球大学大学院
人文社会科学研究科

比較地域文化専攻

学生番号

氏 名 瀬戸 哲也

学位論文要旨（横書き楷書、ワープロ可、字数800字程度）

本研究は、「陶磁器列島」と称されるほど多く出土する琉球列島の中国産等陶磁器を、集落・グスク・港湾との関係を踏まえてグスク時代の陶磁交易を明らかにし、かつ国家形成とどのように関連するかを目的として検討し、次のように5点の成果が得られた。

第1に、最も多く出土する中国陶磁を中心に各遺跡の出土状況を踏まえて、グスク時代を11世紀後半～16世紀前半と捉えて、大きく7期に区分しその実年代観を提示した。また、中国陶磁でも大半を占める青磁の生産地は従来から指摘される浙江省龍泉窯系の範疇ではあるが、その中でも福州へ至る閩江上流域の製品が多いことが判明し、寧波を経由するのではなく、大半の陶磁器が福州に集められもたらされたことを指摘できた。

第2に、琉球列島の陶磁交易において、その種類・量が爆発的に増えるのは14世紀後半であり、那覇港の成立と共にその交易拠点が集約されたことが要因とした。沖縄本島各地の城塞的グスクが本格的に整備されるのも同時期であり、陶磁交易の画期と連動することを明らかにした。

第3に、琉球列島では碗・皿などの食膳具を使用する食文化は、グスク時代に入っても社会全体には根付かず、13世紀後半以降に普及したのではないかと考えた。15～16世紀には大規模に陶磁が廃棄される状況から、短期的な宴会に使用されたとした。

第4に、グスク時代における階層化について、陶磁交易、集落形態、城塞的グスクから検討し、13世紀代までは顕著な差はなく、14世紀後半以降に明確な有力者が登場するとして、15世紀末には首里グスクを拠点とする最有力者に一極化した。

第5に、グスク時代を11世紀後半の農耕受容から16世紀前半の中央集権国家成立までの約500年間として、それ以降は近世社会の開始として再定義した。考古学的には、琉球史における尚巴志による琉球統一、薩摩侵攻の画期を重視しないと結論づけた。